ふくしま県人会だより

第２７号
平成25年１月
福島県人会
北海道連合会

思いを新たに

会長　熊坂　成剛

会員のみなさん明けましておめでとうございます。お健やかに新年をお迎えになられた事と思います。

年改まれば、人はみな思いを新たにして一歩を歩まんと思い致すのではなかろうかと思っております。

三・一一のあの東日本大震災と福島第一原発事故から二度目の年を越しました。被災地の様子、被災者や避難者の様子に思いを馳せておりましたが、昨年の十一月七日福島県で「第三回全国うつくしま県人会交流会」に出席したのを機会に、被災地を見させていただきました。

福島県庁から国道一一五号で五十四キロの相馬港へ。道々海水を被り耕作出来ない田畑が続き、何も植えられず、どこの田畑にも人影が見えません。道すがら瓦葺の家が見え屋根の上に三・四人の人影がおり、近づいたら高圧ジェットノズルを持って屋根瓦と雨樋に噴射しているのが見え、庭先に人影はなく除染作業中の様子でした。

港では岸壁の修理中でしたがいつ以前と同様に使えるのでしょうか。魚市場は屋根と柱だけ、セリの声もなく廃墟と化し、市場の近くには事務所や商店が立ち住居もあったそうですが、今は見渡す限り目を遮るものも無く、足下には建物の土台だけがずっと続き雑草が伸び荒廃の一語と言う現地の状況でした。

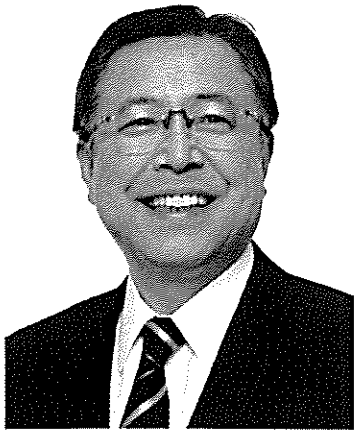
ＴＶの年末特集「被災地のいま」とタイトルをつけた様々な映像を前に、経済的、精神的にも解決する術を持たない被災者への支援を忘れてはならないと思いました。

政権が変わり原発事故処理や新設、再稼働など舵を切り替えようとしています。被災の悲しみも苦しみも踏みにじられるのかと思います。

年の改まったのを機に思いを新たにして、一緒に心配をし、共に悩み、手を取り合って苦しみを分かち合える県人会仲間であります。心と行動で歩みを進め復興、再建を図る母県を応援していきましょう。

“新生ふくしま”をめざして

福島県知事　佐藤　雄平



謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

昭和四十八年の発足以来、皆さんの県人会が、ふるさとを同じくする方々の心のよりどころとして、会員相互の交流を深めながら、着実に発展を続けられておりますことは、誠に喜ばしい限りであり、会員の皆さんのふるさとを想う御熱意に心から敬意を表します。また、皆さんには、本県に格別のお力添えを賜り、厚く御礼申し上げます。

東日本大震災からまもなく二年を迎えます。

本県は、十五万人余の方々が県内外で避難生活を余儀なくされるなど、依然として厳しい状況が続いており、多くの方々が今年もふるさとで新年を迎えられないことは本当に残念でなりません。一日も早く全ての県民が安心し

て暮らせる環境を取り戻さなくてはならないと決意を新たにしております。

昨年は、厳しい状況の中でも、「ふくしまから　はじめよう。」を合言葉に、復興への第一歩を踏み出し、県民の皆さんのたゆまぬ御努力、国内外からお寄せいただいた多くの御支援により、本県は着実に元気を取り戻し、明るい話題も増えてまいりました。本年は、この歩みをさらに加速させてまいりたいと考えております。

県では、震災からの復興を果たした三十年後の姿を展望した県総合計画「ふくしま新生プラン」を策定しました。

基本目標は、「夢・希望・笑顔に満ちた〝新生ふくしま〟」。若い世代が将来に夢や希望を持って生き生きと活躍できる社会、安全・安心で原子力に依存しない持続的発展が可能な社会を目指してまいります。

その実現に向け、除染、健康管理、防災対策の充実などを進め、県民生活の安全・安心をしっかりと確保してまいる考えであります。

また、地域経済を震災前の水準に戻し、更なる発展を期して、農林水産業や既存企業の再生はもちろん、再生可能エネルギーや医療機器関連など時代をリードする産業の集積を進めてまいりたいと考えております。

さらに、大河ドラマ「八重の桜」の放送に合わせ、会津を始め県内全域で観光を盛り上げ、改めて本県の魅力を広く発信してまいります。

さまざまな場面で、「人のため、ふるさとのために尽くしたい」「夢を持って未来に進みたい」、そうした子どもたちの声を聞くたびに、美しく豊かな県土を取り戻し、次の世代に引き継いでいかなければならないとの思いを強くしております。

多くの方への感謝とふるさとへの誇りを胸に、子どもたちの笑顔あふれる明るく元気な「新生ふくしま」を目指し、復興に全力で取り組んでまいりますので、県人会の皆さんには一層の御支援、御協力をお願い申し上げます。

終わりに、福島県人会北海道連合会の限りない発展と、会員の皆さんの御健勝、御活躍を心からお祈りいたしまして、年頭のごあいさつといたします。

連合会の活動

第四十一回

福島県人会北海道連合会総会

日時　平成二十五年六月一日（土）～二日（日）

場所　ホテル大雪（上川町層雲峡温泉）

後日、ご案内を送付します。皆様お誘い合わせのうえ、参加下さい。

会員通信

設立百周年に近づく札幌福島県人会の現状は

札幌福島県人会　理事　井上　専治

私達の札幌福島県人会は「さっぽろ文庫五十四『県人会物語（札幌市教育委員会編、平成二年九月発行）』」「七十三頁から八十一頁参照」によれば『大正六年五月会員約七十名余りで改めて県人会が成立されている』と、設立を公にしています。

ここまでの経過は明治二十年旧会津人懇親会が開催され、明治二十八年福島県人懇親会設立とあり、次いで大正六年五月、正式に札幌福島県人会が設立されたとあり、本年は設立から九十六年となります。

現状の札幌福島県人会員は、名簿在席は六十三名、家族会員を含めると六十九名であり、設定当初より少ないのであります。九十六年間の会員の出入りは、ひとときに二百名近くまで増えた時期もあり、常駐者より移動者が多かったようだし、会員の高齢化による自然減少もあったようだが、後継者に対する県人会のＰＲと勧誘努力が少なかったと思います。

今、在籍者の年齢を平均すると六十九・六歳であり、最高が九十五歳で一番若くて三十六歳です。役員の年齢も平均七十四・五歳でございます、年々歳々高齢になるのは解っていますが、若い会員は勿論、親子二代目後継者を如何に呼び込むかが、今後の問題であると同時に、県人会の魅力は何か、運営の基本はと、なることであり

ます。

さて、九十六年の歴史で一番の目玉は県事務所の開設誘致運動です。

実は、私は親子二代続けての会員であります、親父は県の物産斡旋所呼びこみ当時の札幌福島県人会会長で井上三郎でした。

札幌市内に他県十一県が観光と物産の斡旋のために県の事務所を設けていたのに、福島県が無かったので、昭和二十六年に札幌福島県人会から福島県に物産斡旋所開設の陳情書を提出してお願いしたところ、翌昭和二十七年に早速設置されました、当時の知事さんは大竹作摩知事でした。

当初の名称は『福島県物産斡旋所』で、所在地は中心部の南一条の電車通りで、電車の窓からみることが出来ました。

その後、変遷を経て現在の経済センター内に、名称も『福島県北海道事務所』となって、皆さんご存知のとおり福島県の物産と観光の宣伝を合わせて人事の交流を行う本柱に生長しています。

二番目が福島県人会北海道連合会の結成です。経済センターに落ち着いた福島県北海道事務所が出発点となり昭和四十七年、当時道内には十一福島県人会があり会長会議を開催、連合会結成について提案され全員一致で決定し、八月北海道事務所二十周年式典の折、具体的準備打ち合わせを行ったとあります。そして昭和四十八年五月七日函館湯の川温泉芳明荘において『福島県人会北海道連合会の第一回の会合』を開催しました。当時の福島県知事さんは木村守江知事さんで、連合会初代会長には当時の札幌福島県人会会長の高田富与さんが就任しました。以来、昨年の浜中・別海県人会担当での『川湯温泉での総会』が『第四十回』になります。このように私達の県人会組織は一分一秒休むことなく進んでおります。

やがて来る札幌福島県人会設立百周年を目指して、お互いに現状確認と一般会員は勿論、若手会員増強に、頑張りましょう。事業の一部近況報告といたします。

第二回「会員作品展」を開催（設立五十周年記念事業として）

函館福島県人会
事務局長　古山　利勝

今年は当会の設立五十周年に当たりますが、これを記念して第二回「会員作品展」を去る九月二十九日から十月九日までの間、函館新聞社ギャラリーで開催しました。

作品展には会員と家族十二名から切り絵、人形、木工品、彫刻、藍染、水彩画、書道、写真、手芸品等百点近い作品が出展されました。また、会場には、県の「ふくしまは元気です」のポスターやメッセージを掲出し、支援に対するお礼と復興に対する決意を表明しました。

地元新聞でも取り上げてくれ、期間中一二〇名の来場者があり熱心に見入る姿にはうれしくなりました。来場者には福島に伝わる縁起物の「会津起上がり小法師」をプレゼントし喜ばれました。県北海道事務所にも広告物の手配など大変お世話になりありがとうございました。

設立五十周年記念事業としては他に記念のタオルを作製し、会員と母県からの避難者、それに日頃協力いただいている先に配付しました。また、作品展の反省会も兼ね記念の祝賀会も開催しました。

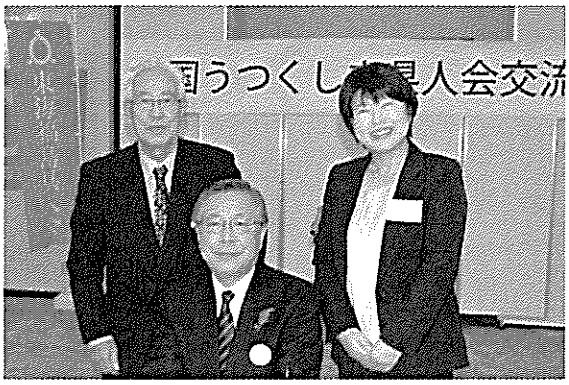
函館福島県人会

副会長　小山　直子

昨年、十一月七日に開催された「第三回全国うつくしま県人会交流会」に初めて参加させていただきました。この全国交流会は、四年に一度オリンピックの年に北海道（連合会）・東京・関西・京都会津会・東海・ひろしま・ふくやま・福岡・沖縄の九福島県人会が持ち回りで開催しているそうです。今回は東海福島県人会が担当でしたが、母県福島の復興を少しでも応援するためにと福島市で開催されました。

各県人会の活動交流では、他団体と共催してチャリティーコンサートの開催や各地区まつりで

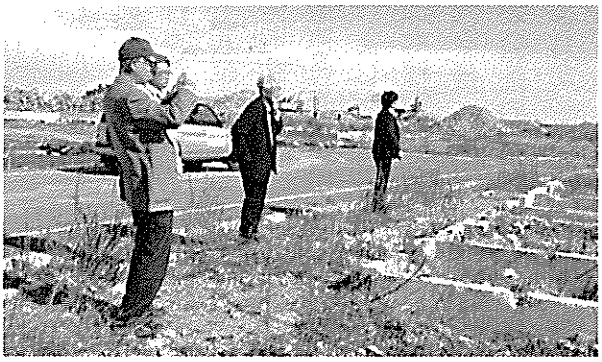
の県産品のＰＲ販売、被災避難者との交流会、駅伝や高校野球の応援など活発に母県の復興のために活動されていることが分かりました。母県復興のためには、三・一一大震災の被害を風化させないことが大事です。そのために引き続き活動を継続させることと、今後は福島県人会から他の県人会や団体に呼び掛けて連携して活動にしていくことなどを確認しました。



熊坂会長　佐藤知事　著者

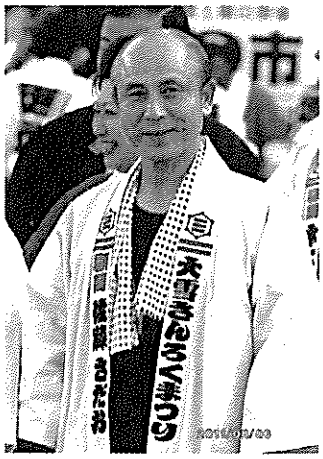
次期開催地は北海道が推薦されました。福島の復興と全国の県人会の皆さんをお迎えするために北海道事務所と共に準備を進めていきましょう。

翌日は、北海道事務所のご高配で相馬港湾の被災状況を視察しました。相馬港は震度六強、津波高は九・三メートル以上のすさまじい力に襲われたことが、港湾事務所や魚市場などの無残な姿に表れていました。また、港の前に広がっていた街並みが津波に飲み込まれ、家の土台を残すのみで一面野原状態の惨状を目にした時は言葉を失ってしまいました。


相馬市　磯部

最後に、福島市にある被災者生活相談窓口の「ふみだす生活サポートセンター」で現状をお聞きしました。相談件数は少しずつ減っているそうですが、避難が長期化することで経済的リスクや家族間の気持ちのずれなどリスクが大きくなることが心配です。これからは、相談と共に精神的ケアが重要になってくるというお話しでした。

震災から二年、母県福島は「ふくしまから　はじめよう。」を合言葉に一歩一歩復興に向けて頑張っています。新年からＮＨＫの大河ドラマ「八重の桜」が始まりました。母県福島の応援団を全国に広げ、誇りあふれるふるさと再生を実現させましょう。



「ふるさと・福島」

旭川福島県人会
副会長　佐藤貞夫

ふるさとの山に向かいて
言うことなし
ふるさとの山はありがたきかな

私は、昭和二十八年に伊達郡桑折町に生まれました。桑折町は福島盆地の北西部に位置し、町の南東部を阿武隈川が流れ、遙かに阿武隈山系を望む静かな農村地帯の中にあります。桑折という町の名前の由来からも昔は養蚕が盛んで、私が子どもの頃にはまだ桑畑も沢山ありました。また、親戚の家には蚕棚があり、裸電球の灯りの下でお蚕さんが桑の葉を一生懸命食べているのを見た記憶もあります。

福島県の代表的な果物といえばやはり桃ですが、例年皇室への献上桃として桑折町産「あかつき」が献上されていることは町の人達の誇りでもあります。私の生まれた家も農家で桃とお米を作っていました。桃ばかりでなくりんごや柿も色々な種類があり、美味しい果物に囲まれて育ちました。また、山に行けば栗やアケビそしてきのこや山菜も豊富で栗ご飯やきのこの入った山菜ご飯

をおばあちゃんに作ってもらうのが楽しみでした。夕方暗くなるまで近所の子供たちと野山や稲刈りの終わった田んぼを走り回って遊んだ日々が昨日のように懐かしく思い出されます。今は父も母も亡くなりましたが、貧しくとも精一杯の愛情を持って育ててくれた両親に心から感謝をしています。

今ふるさと福島は東日本大震災で大変な被害を被りました。しかし、いつの日にか必ず復興してふるさとの山を取り戻すことを北海道から祈っています。「頑張れ東北、頑張れ福島」

志を果たして
いつの日にか帰らん
山は青きふるさと
水は清きふるさと

福島県人会に入会して十余年

美幌福島県人会
副会長　前崎孝子

東日本大震災より二年になろうとしておりますが、いまだに家に戻れない家族の方も多くおられる事と思い浮かべながら、心よりお見舞い申し上げます。

住み慣れた家、親子、友と離れ離れになられた方々、一日も早い立ち直りと復興に、どうか東北魂でしっかり頑張って下さい。

私が、福島県人会に入会して十年あまりですが、当時を振り返り思い浮かべてみました。

この美幌町にも福島県人会があったことは、知っておりましたがそれは「美幌秋まつり町民手作りふるさと祭り」に出店されておりました福島県人会の幟旗が目にとまり、何となく母親の故郷だな・・・との印象だけでありましたが、店の前に立った時に強く感じたものがありました。

県人会の多くの会員家族の皆さんで、たいやき、やきとり、やきそば、等々お客さんの長い列にもニコニコしながら汗だくで楽しそうに対応している姿に福島の人の温もりを感じずにはいられませんでした。

その後、母親の故郷に思いが募り、姉と二人で福島を訪ね、先祖の墓参を実現する事が出来た時の感動は生涯忘れることが出来ない思い出となりました。その後、県人会の仲間入りをさせていただきました。

昨年は、会長を中心に母県震災復興支援の活動をスタートし、諸行事を開催しました。これからも会長を中心に年間行事の活動を楽しみに会員の親睦と交流の輪を広げて行きたいと思います。一日も早い母県の復興を願いながら・・。

猿払村の地域医療に関わって

稚内福島県人会　佐々木　正

音威子府駅前にて

北海道の医療に関わって十五年になりました。以前の茨城県・福島県を含めて四十五年間、殆ど病院の臨床検査技師・薬剤師として活動しています。

北里大学を卒業してから、主に地方勤務し地域の患者さんの人生の生きざまや地方独特の風習、人情等を学ばせてもらい、地域住民との交流が仕事に役立ち楽しいものになっています。

日本人は、世界一薬好きの民族です。しかし、これが患者さんにとっては良いとは思いません。薬と毒は紙一重で、「くすり」の反対は「リスク」です。特にちょっとしたカゼで病院にかかったり薬局のカゼ薬を購入します。その時だけ効果はありますが感染予防として抗生剤を処方する医師も多くみられます。カゼの多くはウイルスが原因で、抗生剤は効きません。カゼのひき易い患者さんに質問すると、冷え性体質の人が多くみられます。逆に考えると体を常に温める事で自然に免疫が高まりカゼをひきにくくなることにもなります。昔から暑い夏にはスイカ、寒い冬は暖かい鍋ものが美味しく好まれています。漢方の見方からみると、夏は冷やす、冬は温める事を体が自然に要求しています。常に生命体は恒常性、即ちバランスを保つ能力に長け

ています。

日本の自治体の中でも猿払村のワクチン接種の公費助成は先端を進んでいます。これにより高齢者に多い肺炎の死亡率を低くする肺炎球菌ワクチンの接種率が高くなり、カゼによる受診が低くなり医療費の軽減傾向になっています。特に、体が弱っている患者さんや七十五歳以上の高齢者には、積極的に公費助成の恩恵と共に積極的に説明しながら肺炎球菌ワクチン接種をすすめています。老化は自然の現象そのもので病気ではないことを理解させながら、医師にも薬の処方量を減少させ、日常生活の大切さを指導しながら効果も多くなりつつあります。

現在、旭川医大と猿払村国保病院の共同研究で胃癌の原因であるピロリ菌を、院長らが特許取得したある薬品を光化学治療法で、外来で内視鏡を使う撲滅可能な成果になりそうで、今夏に国際学会で発表予定になりました。過疎地にいながらも新しい発想ができる環境に私も参加している喜びを感じているこの頃です。

これも地域医療に参加し、多くの患者さんやスタッフの方々、大学や医療関係者、他分野の関係者との交流が大きな要素になっています。私は、原発災害にもまれた福島県の魂を発揮するつもりです。

新会員紹介

札幌県人会
新城　俊則　会津若松市

函館県人会
明本モト子　様似町

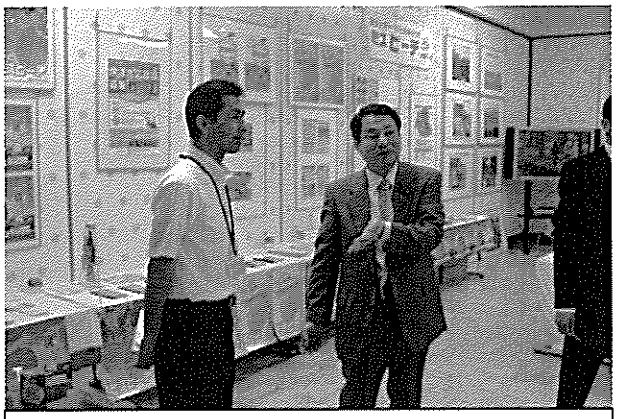
ＯＢからのお便り

県産農産物を全国にＰＲ

第十五代次長　飯田　純也

県人会の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのことと思います。

私は平成二〇年四月から北海道事務所に勤務し、二十三年三月に福島に戻る準備を始めたところで東日本大震災が発生しました。



農水省「消費者の部屋」で郡司前農相にももをＰＲ（著者　左側）

震災後は、母県の情報収集や道内への避難者支援に当たったこと、連合会総会を急きょ札幌で開催したことなどがつい最近のように思えます。

これまで県人会の皆様には、様々なご支援とご協力をいただき、改めて感謝いたします。

現在私は、農産物流通課で風評払拭の業務に当たっています。桃の季節には札幌でＰＲしましたが、そのほか東京をはじめ大阪や沖縄でも青果物や米のＰＲを行ってきました。

震災直後は道内でも福島県産の農産物が取引されずに大変でしたが、消費者の皆さんのご理解や流通関係者のご努力により販売は回復に向かっています。

今の季節はニラやシュンギク、イチゴなどが出荷されており、県ではしっかりと検査をして安全性を確認しておりますので安心してご利用ください。

さて、北海道の三年間は本当に楽しく貴重な時間でした。どこの景色も美しく、食の魅力も満点の北の大地は、とても三年間では回り尽くせませんでした。

季節の花では、静内二十間道路の桜並木、滝川の菜の花、滝上のシバザクラ、平取のスズラン、そして札幌のライラックなど、広大に咲き誇る様が思い浮かびます。

札幌のイベントでは、よさこいソーランのエネルギッシュな演舞や、大好きな倉本聰の舞台にも毎年感動させてもらいました。

こうした思い出や県人会の皆さんとのふれあい、そして今後の北海道旅行への想いなどを胸に、今後とも本県農林水産業の振興に力を尽くしたいと思います。